

## 「希望に生きる」

使徒言行録 1:3-14

教会の暦によると、先週の木曜日、5月13日は「昇天日」ということになっていました。つまりイエス・キリストの復活を記念するイースターから数えて40日目にあたり、イエスさまが天に昇られことを記念する日でした。十字架によって殺され、三日目に復活されたイエスさまは、40日間にわたって弟子たちに現れ、彼らの不信仰をたしなめ、「どんなときでも主は共におられる」ということを、身をもって示されたのです。その復活された主イエスが、この40日目に天に昇られ、神さまのみもとに帰られたのです。私たちは「使徒信条」の中で、「(主イエス・キリストは、)天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり」と唱えますが、主イエス・キリストは、地上での「人の子」としての務めをまっとうされて、「神の子」として、天の父の御許に帰られたのです。今日の使徒言行録1章3節以下は、その主イエスが天に昇られた場面を中心に、その前後の主イエスと弟子たちの様子を記した記事です。

3節にこう記されています。「イエスは苦難を受けたのち、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、40日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。そして彼らと共に食事をしていたとき、こう命じられた。『エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなた方は間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。』」

復活されたイエスさまが、天に昇られるに先立って、まず弟子たちに語られたことは、「エルサレムを離れるな」ということでした。エルサレムは、イエスさまが捕らえられ十字架にかけられ殺された場所です。また、弟子たちがユダヤ人たちを恐れて、隠れ家に鍵まで掛けて、閉じ籠っていた場所です。イエスさまを捕えて、処刑するために引き渡したユダヤ人たちが、いつ自分たちを捕らえに来るか分からないという不安と危険におののいていた場所でした。そこを離れて逃れるな、と主は言われるのです。

ペトロをはじめとする弟子たちは、一時、郷里のガリラヤ湖のほとりに逃げ帰ったこともありましたが、復活された主イエスは、あえて、その危険な、苦難に満ちたエルサレムに彼らを招き、そこを「離れるな」と命じられたのです。その最も困難な場所を拠点として、そこから神の国の福音が全世界に広められることを願われたからです。

だれでも、危険な場所、困難で嫌な思い出のある場所からは、早く逃れたいと思うものです。安全な静かな場所で、ひっそりと安楽な生活をしたいとおもうものです。弟子たちは、心の中でそのように思っていたに違いありません。

しかし、イエスさまは、弟子たちに「エルサレムを離れるな」と命じ、そこで、「父の約束されたものを待ちなさい」と言われたのです。この「父の約束されたもの」とは、父なる神さまが弟子たちに与えると約束された神の霊、「聖霊」のことです。来週の日曜日が、その聖霊が弟子たちに下った「聖霊降臨日」、「ペンテコステ」にあたるわけですが、その時を待て、と言われたのです。その聖霊降臨の出来事については、来週、礼拝の中で学びますが、弟子たちは、やがて、この聖霊の力に満たされて、信仰の確信を与えられ、熱く燃えるような思いをもって、大胆に神の言葉を語り、多くの人々にイエ

ス・キリストを宣べ伝える者に変えられるのです。

イエスさまが、この昇天まぎわに弟子たちに語られたことは、その神からの霊、「聖霊」が与えられるまで、「エルサレムに留まり、待ちなさい」ということなのです。「待つ」ということは、決して楽なことではありません。忍耐の要ることで、私の苦手とすることです。弟子たちの中には、「自分たちは40日間にわたって、たびたび復活の主・イエスと出会ったし、神の国の教えを聞かされた。だから別に聖霊を受けなくても、自分たちの力でやっていける」と考えていた人がいたかもしれません。

6節を見ると、弟子たちはイエスさまに向かって、「主よ、イスラエルのために国を立て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねています。「今こそ、この国を立て直すために、立ち上がる時ではないか」という弟子たちのはやる気持ちが読み取れます。しかし、イエスさまは、それに対してこう言われたのです。「時や時期は、父なる神さまが、権威をもって定めることであって、あなたがたの知るところではない」と。

私たちは、自分のその時その時の思いで、色々な夢を抱き、計画を立てます。しかし、その夢や希望は、私たちの思い通りには、いかないものです。時や時期があって、それは神さまが定められる、という面があるのです。旧約の「コヘレトの言葉」の中に、「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある」という言葉があります。生まれる時、死ぬ時、植える時、植えたものを抜く時。殺す時、癒す時。泣く時、笑う時。…黙する時、語る時」があって、「神はすべてを時宜にかなうように造り、また永遠を思う心を人に与えられる」(3:1-11)のです。

ことに伝道は、ただ私たちの熱意や決意だけでなされるものではありません。神さまがご計画に従って、時を定め、神さまご自身が働かれるのです。

イエスさまは、弟子たちにこう言われました。8節、「あなた方の上に聖霊がくだると、あなた方は力を受ける。そして、エルサレムばかりではなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と。

イエスさまは、心はやり、何かをしなければ、と焦る弟子たちに、「待て！ここに留まり、神さまからの霊の力を受けるのを待ちなさい。神さまのご計画に従って、あなた方は地の果てまで、私の証人となるのだ」と言われたのです。

今、私たちはコロナ禍の中で、自粛を強いられ、様々な活動の自由を奪われています。やりたいことやらねばならないと思うことが山ほどあっても、身動きが出来ない状況にあります。それでなくても、私たちの教会は今、無牧の中で、これからの道を模索しているような状態です。今は、焦って何かを為す時ではなく、忍耐の時であり、待つ時だと思えます。こういう中でこそ、私たちは、すべてを支配し、すべてを導いておられる神さまを信頼し、神さまの導きを祈りつつ、「時にかなって美しい」という神の御業を待ち望むことが、求められているように思います。

「あなた方の上に聖霊が降ると、あなた方は力を受ける。そして、あなた方は地の果てに至るまで、わたしの証人になる」。イエスさまはこう語られると、弟子たちが見ている前で天にあげられ、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった、というのです。

弟子たちにとって、イエスさまの姿が見えなくなったということは、実に心もとない寂しい思いがしたことだと思えます。しかし、彼らは以前のように取り残された孤

児のような恐れや不安に陥ることはありませんでした。復活されたイエスさまとの出会いを通して、「イエスさまは常に共にいてくださる」ということを、信じる事が出来るようになったからです。しかも、やがて「聖霊」によって上からの力が与えられる、という「希望」が与えられたからです。

弟子たちに与えられた約束は、それだけではありません。天を見上げて立ち尽くしている彼らに、天使と思われる二人の白い服を着た人がそばに立って、「なぜ、いつまで天を見上げて立っているのか。あなた方から離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」と言われたのです。これは、イエス・キリストの再臨の希望について語られた言葉です。いつかは分かりませんが、主イエスは、再び目に見える形で再びこの地に来られるというのです。

弟子たちをはじめ、初代教会の人々は、このような終末の希望をもって、迫害や様々なこの世の患難や苦しみに耐え、聖霊の導きのもとに、地の果てを目指して、イエス・キリストを宣べ伝え、証ししたのです。いつの時代も、教会は、邪悪で矛盾に満ちたこの世にあって、父・子・聖霊なる神が、常にこの世を支配しておられ、やがて再び来たり給うキリストの統治のもとに、救いの御業が完成し、神の国が実現すると信じつつ、「御国を来たらせたまえ」と祈り続けたのです。

このように、主の昇天後、弟子たちは、直接イエスさまの姿を見ることは出来なくなりましたが、やがて、主の霊が与えられることを待ち望み、また、いつの日か、主ご自身が再びお出でになることを期待して、みんなで心を合わせて、熱心に祈ったのです。弟子たちは、この希望によって、新しい命と力を与えられたのです。

私は、今日の説教題を色々考えた末、「希望に生きる」としました。希望こそが、生きる力だと思ったからです。人間にとって、未来に希望がなかったら、生きていくことができません。このことは、ヴィクトール・フランクルというユダヤ人の精神科医が、「夜と霧」という本の中で強調して語っていることです。この本は、あの第二次大戦下のドイツで、あのヒットラーの支配のもとで、600万人ものユダヤ人が虐殺された時、フランクルも、ユダヤ人としてアウシュヴィツの強制収容所に入れられ、危ういところで一命をとりとめたのです。この本はそこでの体験をもとに綴られたものです。

この本の中で、フランクルは、あの生きるか死ぬかという極限の状況の中で、人は何によって生きるか、ということを経験科医として立場から冷静に観察して綴っているのです。その中で彼が語っていることは「未来に対して希望を失った者は、内的にも身体的にも崩壊し、生き延びることが難しくなる」ということです。その一つの例として1944年のクリスマスから翌年の新年にかけて、原因不明の大量の死亡者出たことに触れています。その大量死亡の原因は、囚人の中に、クリスマスには解放軍によって解放されて家に帰れるという、素朴な期待が広がり、多くの人々がその期待に身を寄せたためだということです。しかし、クリスマスが過ぎても、地獄のような事態は少しも変わらず、失望落胆した人々は生きる拠り所を失ってバタバタと死んでいったということです。彼らの多くは「私はもはや人生から期待すべき何物も持っていないのだ」と語ったのです。フランクルは、そのような事態に接して、このように述べています。「ここで必要なのは、生命の意味についての問いの観点変更だ。すなわち、人生から何を我々はま

だ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何を我々から期待しているかが問題なのだ」と。

つまり、分かりやすく言えば、「生きていれば何かいいことがあるではないか」という、漠然とした受け身の姿勢ではだめだということです。そうではなくて、「自分が生かされていることの意味は何か、今、この状況の中でどう生きるべきか」という「神からの問い」に答えて生きるということだということです。私たちは、皆、神さまから愛され、必要とされて生かされている者です。その命を感謝して、神の前に精一杯に生きること。そこに生きる意味と希望がある、ということだと思います。

パウロは、「目に見える者に対する希望は希望ではありません」(ローマ 8:24)と語り、「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」(Ⅱコリント 4:18)と述べています。私たちの希望は、見えざる神さまの御手の中にあるのです。神さまは、私たち一人一人にそれぞれに相応しい賜物を与え、それぞれに生きるべき道を示しておられるのです。聖霊によって神さまから与えられる力を受けて、地の果てにまで、主キリストのみ名があがめられるために、共に祈りつつ励みたいと思います。           アーメン